

「マグロ」つてなに? -マグロ・カツオ類の生物学・  
漁業・資源-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 魚住, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2010361">https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2010361</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



# 「マグロ」ってなに？

—マグロ・カツオ類の生物学・漁業・資源—

魚住 雄二

遠洋水産研究所 近海かつお・まぐろ資源部

## 1. はじめに

一般に「マグロ」と呼ばれる魚は、分類学で言う「マグロ属」に属する魚のみをさすことが多いのですが、ここでは、日本でマグロに並んで多く利用されている「カツオ」も含めてご紹介します。

## 2. 種類、寿命、分布

マグロ、そして、カツオは「サバ」に比較的近い仲間です。マグロ、カツオの祖先は熱帯域の岸近くにいた「サバ」の祖先が沖合に分布を広げて行き、外洋に分布する「マグロ」へと進化していったと考えられています。

さて、マグロと言っても、いくつもの種類があります。その中で、まず、マグロといえば、高級刺身の代表格の「クロマグロ」、そして、「ミナミマグロ」が挙げられます。次に、最も一般

に食べられているマグロのお刺身の原料となっているのが「メバチ」と「キハダ」です。そして、最近、「トロビン」などと呼ばれる刺身として人気急上昇の「ビンナガ」が比較的良好に知られています。マグロ属の中には、このほかに日本でも、ごく一部の地域でしか縁のない「コシナガ」、そして、大西洋にしかない「タイセイヨウマグロ」を含めて合計7種類が知られています。カツオは、「カツオ属」に属する魚で、近い仲間としては、ソーダカツオ類などがあげられます。これら、マグロ・カツオ類の外見は、比較的似ていて、区別するのが困難な種類もありますが、分布域や生態などにははっきりとした違いが見られます。

マグロ類は一般に成長も早く、そして、大きくなることが知られています(図1)。最も大きくなる種類は、クロマグロで、体長は2.5m

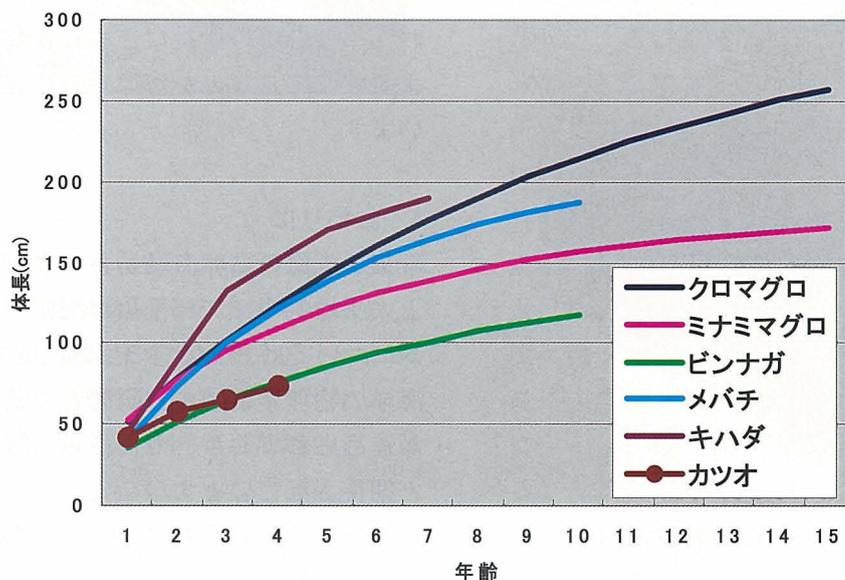


図1. マグロ・カツオ類の成長

を超え、重さも300kgを超えるものもあります。一方、マグロの仲間でもビンナガは、あまり大きくならず、1.5mを超えることはまずありません。カツオは、大きくてもせいぜい70~80cm止まりです。寿命も種類によってかなり異なります。現在知られている最も長寿な種類は、ミナミマグロで40歳を超える魚が知られています。クロマグロも長寿で、少なくとも15歳以上であろうと考えられています。一方、カツオは、せいぜい5~6歳で寿命を終えると考えられています。

さて、マグロは「高度回遊性魚類」という仲間の代表格といわれています。世界をまたに駆けて回遊する魚ということですが、分布も世界中に広がっています(図2)。クロマグロ、ミナミマグロは、主として温帯域を中心に分布します。一方、キハダ、メバチ、そして、カツオは、熱帯域が中心となります。その中間がビンナガです。

### 3. 漁業と資源

世界中に広く分布するマグロは、世界中の100を越える国々によって漁獲されています。

また、そのマグロを獲る漁業にもとても多くの種類があります。沿岸にある「定置網」、小さな船で行う「曳き縄」、そして、カツオの「一本釣り」、更には、150kmもの長い縄に3,000本近くの鉤をつけて釣る「はえ縄」、1,000トン級の大きな船に強力なエンジンをつけて、マグロを追いかけて巻き取ってしまう「まき網」。鳥を取る「かすみ網」のようなものを海に広げてマグロを絡め獲る「流し網」などです。

これらの漁法で、今、マグロ・カツオは世界中で約370万トンが漁獲されています。第2次大戦後、漁獲はどんどん増大し、今では1950年ころの漁獲の10倍近くにまでなっています(図3)。日本は、60年代より50~60万トンを漁獲し、一貫して、世界第1位を守っています。しかし、日本の世界の漁獲に占める割合は、年々減少し、1950~60年代では、世界の漁獲の半分以上を占めていたのですが、近年では、全体の15%程度にまでになりました。その大きな理由は、日本の漁獲が、昔に比べるとやや減少傾向にあるのに反して、外国の漁獲が急速に伸びているからです。それに伴って、日本への刺身用などのマグロの輸入も急増しています。そのた

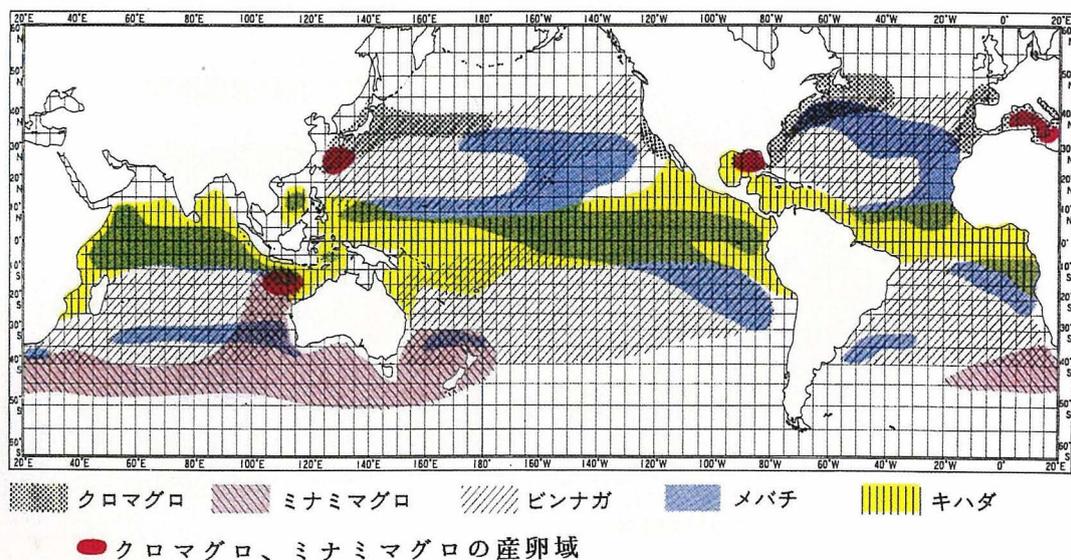


図2. マグロ類の主要分布域  
(遠洋水産研究所資料)

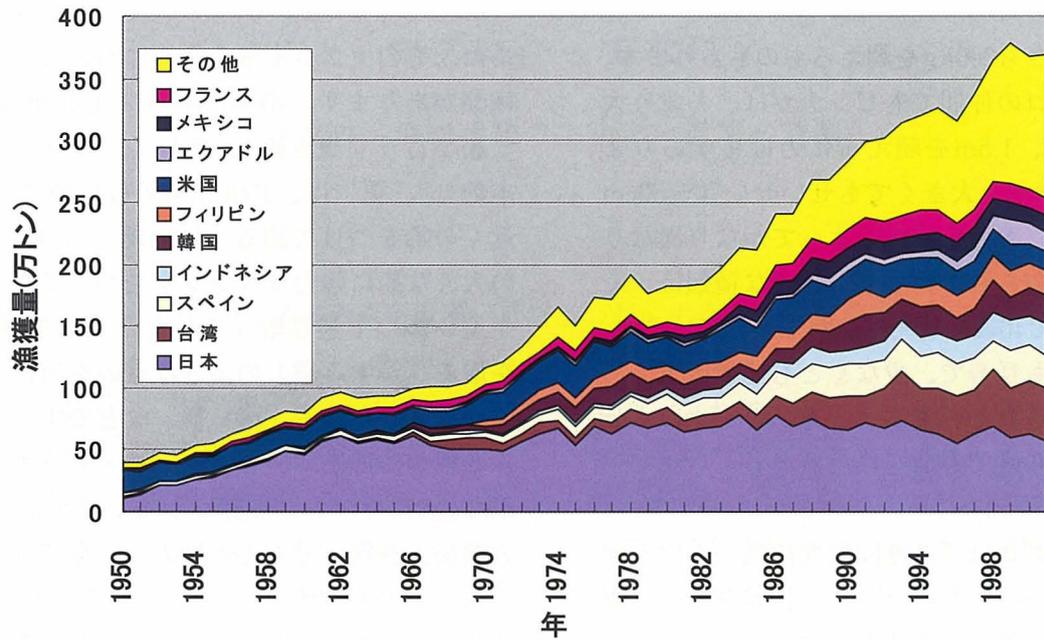


図3. 世界のマグロ・カツオ類の漁獲量の変遷 (FAO 統計より)

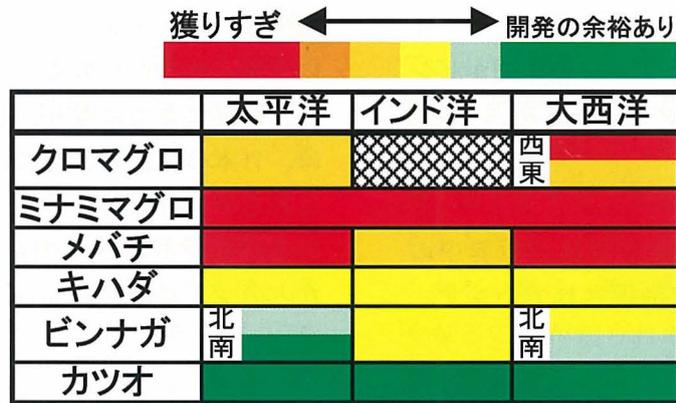


図4. 世界のマグロ・カツオ類の資源状態

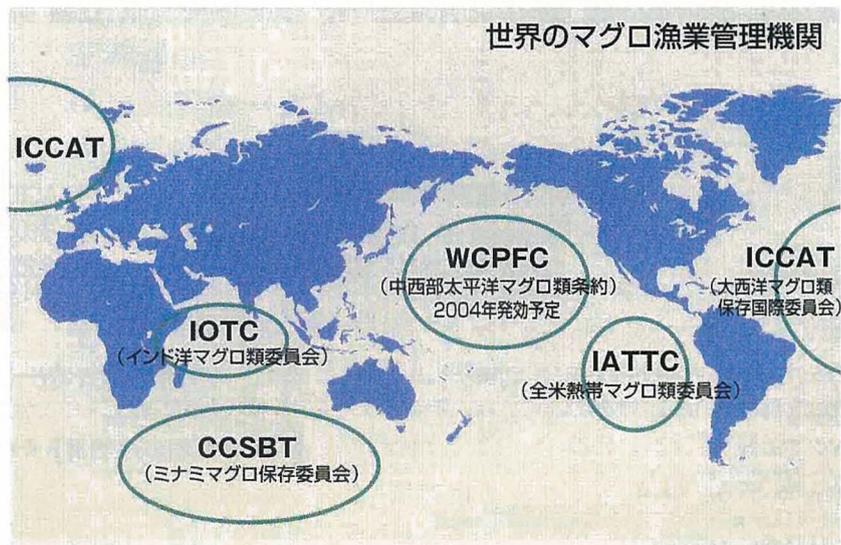


図5. マグロ・カツオ類の国際管理機関 (OPRT パンフレットより引用)

め、日本のマグロ漁業は、苦しい立場におかれています。

また、そればかりではなく、マグロの漁獲の増大によりクロマグロやミナミマグロをはじめとして「獲りすぎの状態（乱獲状態）」になったマグロが多くなり、もっと漁獲を伸ばせる可能性のある資源は、カツオを除いてほとんどない状態にまでなっています（図4）。そして、既に多くの水域で、マグロ漁業の国際的な規制が実施されています。マグロの国際的な管理のために、世界中の海に条約が結ばれ、国際管理委員会が組織されています（図5）。最も新しい条約は、今年の6月に発効した日本周辺までも含む「中西部太平洋マグロ類条約」です。日本も来年初めにはこの条約に加盟する予定になっています。これらの条約の下、これからもマグロの持続的利用を目指した国際管理は進められてゆきます。

マグロを持続的に利用するためには、マグロ

の資源が今どんな状態なのか、どのくらいの漁獲をすればよいのかを知る必要があります。日本は、漁獲割合こそ減少しましたが、今でも最も重要な漁業国であり、また、重要な輸入・消費国でもあります。お刺身用のマグロのほとんどが、世界中から日本に集まってきます。そんな日本は、マグロの資源を将来にわたって利用できるようにしっかりと調査・研究し、漁業管理にも世界のリーダーシップをとって行く義務があるわけです。

#### 4. おわりに

水産総合研究センターでは、資源管理のための資源の状態を把握する調査・研究、漁業の改善・効率化を進める調査、そして、養殖やつくり育てる漁業に関する研究・技術開発など基礎的な研究から応用、実証的な調査、技術開発を進め、数多くの成果を得てきています。